

フィンランドにおけるナショナル・アイデンティティの構築と公共圏の再編

— A. Kemiläinen のナショナリズム論の検討を中心に —

The Construction of National Identity and Reorganization of the Public Sphere in Finland:

With Special Reference to A. Kemiläinen's Research on Nationalism

竹内 里欧 (Postdoctoral Student, Jyväskylä University / 京都大学文学部 非常勤講師)

【ねらいと目的】

本研究において、私は、フィンランドの歴史学者 Aira Kemiläinen (アイラ・ケミライネン) (1919-2006) をとりあげ、近代フィンランド社会におけるナショナル・アイデンティティの構築と公共圏の再編について分析を行う。

Kemiläinen は、主にフィンランドのユバスキュラ大学を中心に研究活動を行った、特にナショナリズム研究において国際的に著名な歴史学者である。代表作とされる *Finns in the Shadow of the "Aryans"* (1998) では、人類学という新しい科学の誕生や、1850 年代のゴビノーの『人種不平等論』出版頃より始まる「アーリア人種優越論」流行とのかかわりのもとに、近代フィンランド社会が、「アジア」と「ヨーロッパ」の間にいかなる自画像を描きだしていったか、どのような公共圏を築いていったか、ということについて知識社会学的探求が行われた。ここで注目すべきは、当時、フィンランドは、政治的・経済的に「ヨーロッパの周縁」に位置づけられ、また、その独特の言語構造から「アジア」にカテゴライズされながらも、いわゆる「アーリア人」的身体特徴は、フィンランド社会で非常に多くみられる特徴であったという、一種のねじれである。

従来、公共圏の構築と変容というテーマの先行研究においては、ヨーロッパにおいて周辺的な位置にあった国に対して、十分な関心が払われてこなかった。しかし、フィンランドのようなヨーロッパにおいて「周辺」に位置する社会においてこそ、いかなる公共圏を築いていくかということは切実な課題として認識されたのである。申請研究では、上記のような観点から、Kemiläinen の研究をとりあげ、フィンランドのナショナル・アイデンティティの構築と公共圏の再編について考察を行う。

【活動の記録】

●Kemiläinen が研究活動を行っていたユバスキュラ大学・ヘルシンキ大学での資料収集及び分析

時期: 2009 年 8～9 月、11～12 月

場所: フィンランドのユバスキュラ大学図書館、ヘルシンキ大学図書館

目的: Kemiläinen についての資料収集と分析

調査者: 竹内里欧

●Kemiläinen に指導を受けたユバスキュラ大学歴史民族学部の T. Tuomainen 氏と O. Päänilä 氏へのインタビュー調査

時期: 2009 年 8 月

場所: ユバスキュラ大学歴史民族学部 Historica Building H 110 教室

目的: Kemiläinen の研究や指導について話をうかがった

調査者: 竹内里欧

(写真参照)

●フィンランドのナショナル・シンボル構築にかかわる芸術活動の調査

時期: 2009 年 8～9 月

場所: Ateneum Art Museum (Kaivokatu 2, Helsinki, Finland)、
ヘルシンキ大学図書館 (Unioninkatu 36, Helsinki, Finland) 等

目的: Gallen-Kallela の絵画などの調査

調査者: 竹内里欧

●雑誌記事の収集・分析

時期: 2009 年 11 月～12 月

場所: ヘルシンキ大学図書館

目的: フィンランドを代表する総合雑誌 Suomen Kuvalehti の閲覧とコピー

調査者: 竹内里欧

●「京都大学文学研究科グローバル COE プログラム 2009 年度研究成果報告会」での報告

時期: 2010 年 2 月 17 日

場所: 京都大学文学部新館 2F 第 7 講義室

目的: 本プロジェクトにかんする研究成果の報告及び議論

報告者: 竹内里欧

(※報告者は、フィンランドにおいて他の研究活動も行ったが、ここには、本プロジェクトに密接にかかわるものを中心に記載した。)

【成果の概要】

本プロジェクトでは、特に、Kemiläinen の研究の中でも、「19 世紀～20 世紀初めにかけて、ヨーロッパの周辺に位置する社会において、いかなる公共圏が築かれていったか、どのように自己像を形成していったか」ということにかんするもの (Kemiläinen (1985) (1993) (1998) 等) を中心に考察を行い、以下のようなインプリケーションを得た。

①フィンランド社会の言語的特徴（フィン・ウゴル語派）と Herder の思想の影響

言語とナショナル・アイデンティティの密接な結びつきを強調した Herder の思想は、19 世紀頃より、フィンランド社会にも大きな影響を与えた。フィンランド語の言語的特徴は、フィンランド語推進運動にみられるように、ナショナリズムを高揚させ、国家的自尊心を高める源となるとともに、インド・ヨーロッパ語族に属さないということから、「ヨーロッパ」に必要な「文明」を備えていないという主張の根拠にもなるという両義性を生んだ。

②「文明社会に属している」ことの証明をめぐる現象

「人類学の父」J. F. Blumenbach は、1795 年、フィンランド人は「モンゴリアン人種」に属すると述べた。実際とは異なるこうした「科学的」見解は、19 世紀より広範に流布し影響力を深めていった。「モンゴリアン」・「野蛮」・「ヨーロッパではない」といったイメージは、(当時の基準において) 否定的意味合いを持っていたため、そうしたイメージの払拭のため、様々な現象—身体測定調査、フィンランド出身のミス・ヨーロッパの出自をめぐる議論、オリンピック選手の身体能力の高さのアピールなど—が生じた。大きくまとめると、これらの現象は、「科学的」手段や「外見」のイメージを利用して「文明社会」への帰属を証明するという傾向をもっていたといえる。これは、比較社会学的見地からすると、「文明社会」への帰属を主張するにあたって「精神性」の相似・優越を強調する（せざるをえなかった）近代日本社会の姿を逆照射するものでもある。

文献: Kemiläinen, A., 1993, *Suomalaiset, Outo Pohjolan Kansa*, Helsinki: SHS.

Kemiläinen, A., 1998, *Finns in the Shadow of the “Aryans”: Race Theories and Racism*, Helsinki: SHS.

Kemiläinen, A.ed., 1985, *Mongoleja vai germaaneja?*, Helsinki: SHS.



インタビューを行ったユバスキュラ大学歴史民族学部

